一、二のうちから讃辞の方はぬきにして、註文を出して下さっている部分だけを一部抄出してみよう。

「少くとも例えば人文地理学の領域が姿を見せぬこと、第一部が社会学、経済学、民俗学の三領域に止まっていることは、一抹の物足りなさを覚える。」（中略）「（共同研究の）傾向は何はともあれ劃期的な方法論上の一大躍進であろうが、その実践の場において、それが如何に困難な事業であるかは体験者のよく認知するところであろう。各分野の専門家が夫々の分担を掘り下げて行けば行く程、相互の有機的連繋は六ヶ敷くなるのが常である。それを克服する重要な一つの途――将来の課題――は、各自が自己の領域に忠実であると共に、相関連する諸領域への深い相互理解と全体的な討議をつくすことに在ると信ずる。（下略）」谷口澄夫評より

（西部社会学研究通信2所収）

「然るいえば、村落共同体の理論的研究についての関心が著しく高まっているように思われることからして、アメリカもさることながら、欧洲に於けるこの方面の成果について、次の機会にでも紹介して戴きたい。例えば（中略）

（Centre Detudes Sociogiques）編の Villes et Campanges Civilisation Urbaine et Civilisation rurale en France（中略）

又この点に関連して、河西太一郎を主班とし大塚久雄、松田智雄といった欧洲経済史の人々を中心として、東信地方に於て数年に亘って実施されている農村調査の成果（中略）等にも関心を持たれてよいのではないか。」

山室周平評より（社会学評論19所収）

※※※年報第一輯への書評から※※※

※※※※　※※※※　※※※※、

年報第一輯は各方面で好評であるが、書評